# 筆山

第59号／2015年12月

土佐中・高等学校同窓会 関東支部会報

編集人/ 中平 公美子（59回）

発行人/ 関東支部幹事長　市川 直介（53回）

関東支部ホームページ：http://www.tosako-kanto.org/


メサ・グランデ　〒211-0044 神奈川県川崎市中原区新城5-2-13
http://mesa-grande.blogspot.jp/

## メサ・グランデへようこそ

大学で南北問題を学び、百貨店に就職後、二年半のボランティア休職を取得し、高校時代から夢であった青年海外協力隊に参加。中米、ホンデュラス共和国のマヤ遺跡発掘の視聴覚教育を担当しました。

若いころは海外のことをやりたかったのに、今はどっぷりローカルな活動にハマっています。川崎市にある認定ＮＰＯ法人ぐらす・かわさきで、現在事務局長としてコミュニティカフェ「メサ・グランデ」を拠点に、地産地消の八百屋、飲食業、スペース提供、コミュニティビジネス起業支援、調査及び政策提言などに取り組んでいます。

少子高齢化、核家族での孤独な子育て、非正規雇用の増大、ニート・引きこもり、ブラックバイト、忍び寄る貧困、障害者の割合の増大、生活保護の増加、介護保険制度の改正、空家問題などなど、地域社会の課題を行政や各家庭及び個人で解決しようとするのではなく、市民主体でそれらを解決していこうという動きが加速し、且つ多岐に亘って来ており、継続的にそれらを解決していく活動を行っていくためには、ビジネスの視点が必要です。社会貢献・地域貢献の活動を、余暇活動としてではなく生業として関わっていきたいという意志・価値観を持つ、特に若い人々が確実に増えている感触があります。

「メサ・グランデ」では、食を通じた地域コミュニティの育成にも取り組んでいますが、実は自分自身が相当楽しんでいます！土佐高校同期の女性三人によるコンサートをやったり、青年海外協力隊の同期会を企画したり、お酒の講座、チェンバロライブ、フェアトレードイベント、映画会など、まずは運営している者が積極的に楽しんで、人と人が出会い、つながる場、やりたいことが実現できる場として、地域に根差していければよいなあ、と日々楽しみながら活動しています。

**五九回　田代　美香（旧姓・森井）**

# 筆　山　会

会長　浅井伴泰（３０回）

新年会でお会いしましょう
２０１６年1月9日（土）１１：３０受付開始　１４：００まで
代々木倶楽部　１Ｆアザリア　　男性　７０００円　女性　５０００円

長らく会長として尽力された森先輩（二三回）から今春バトンを引き継ぎました。

岡村（三回）、北岡（五回）、吉沢（十六回）、岡崎（二三回）、森（二三回）（敬称略）の順で、六代目と言うことになります。岡村、北岡両氏は関東支部長との兼務でした。

私が未だ四十歳半ばの頃、関東支部の生みの親、育ての親の近藤先輩（六回）からお誘いを受け、銀座六丁目にあった交詢社のサロンでの昼食会へ出たのが筆山会との出会いでした。

案内には比較的年配者の会ですと書いてあったので若干の抵抗がありました。未だ一回生を含む諸先輩がお元気で食事の後、囲碁、将棋を楽しんでおられました。昼食会の会場はその後二か所を経て現在の赤坂ニューオータニ別館に移り二十年近くになります。又ゴルフ会は昭和四八年にスタートし、十年近い中断の後再開し、以後年二回開催し来春が七十回目になります。歴代の全参加者のスコアは現在の幹事役の小松さん（四一回）の手許にあります。

筆山会がいつ頃どんな経緯でスタートしたのか、昔伺った筈なのに思い出せないでいたら、古い資料の中から昭和五八年四月一日発行の「筆山会だより」が出て来ました。前述の近藤先輩の発案で岩村さん（四一回）が編集したものですが、北岡会長の「発刊の経緯」の中に筆山会が始まってほぼ九年程になるとの記述があるので四八年頃となりゴルフ会のスタートとも一致します。その頃関東支部員に若い方が増えてきたので、落ち着いた雰囲気で話が出来る会を作ろうと言うのが発足の趣旨だったようです。

この創刊号の寄稿者は一回生を含む六人ですが、みなさんが初代三根校長への思いを語っています。又昭和十七年発行の「三根先生追悼誌」（Ａ４版二六八頁）には薫陶を受けた一回生から十六回生までの四十九名の先輩方の敬慕の念が溢れています。

創刊号の中で北岡会長の

## 筆山会の活動と同好会

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 昼食会 | 毎月第三木曜日<br>ガンシップにて開催<br>(ホテルニューオータニ内) | 前田憲一(37) | kmaeda@s4.dion.ne.jp | 080-3364-8885 |
| 新年会 | 代々木倶楽部にて開催<br>来年は1月9日(土)の予定 | 前田憲一(37)<br>中村裕子(37) | kmaeda@s4.dion.ne.jp<br>hiroko-n-kisa@jcom.home.ne.jp | 080-3364-8885<br>090-2633-6124 |
| ゴルフ大会 | コンペを開催<br>5月と10月の第2木曜日 | 小松三男(41) | k0matu12@ae.auone-net.jp | 090-5561-7023 |
| ハイクの会 | 1泊で登山・ハイキング実施<br>毎年夏 | 橋田正幸(37)<br>中島宏(38) | hashida.yokohama@nifty.com<br>nakajima@house-links.co.jp | 090-4946-2295<br>080-5932-7272 |
| 囲碁同好会 | 人形町の碁会所で例会<br>毎月第3火曜日 | 大町正人(38)<br>高田谷洋(38) | m-omachi@msd.biglobe.ne.jp<br>h.takataya@gmail.com | 080-5039-3355<br>080-6580-8359 |
| 麻雀大会 | 年4回大会開催<br>次回は1月16日(土)予定 | 前田憲一(37)<br>大町正人(38) | kmaeda@s4.dion.ne.jp<br>m-omachi@msd.biglobe.ne.jp | 080-3364-8885<br>080-5039-3355 |
| 写真同好会 | 「土佐写楽塾」<br>随時撮影会実施 | 橋田正幸(37) | hashida.yokohama@nifty.com | 090-4946-2295 |

# 筆山会　お墓参り

「三根校長の墓参会も、直接知っている同窓だけではやがて立ち枯れになってしまうのは残念で（中略）若い人達の積極的参加を期待したい」との言葉を再読してはっとしました。墓参会はその後も続きましたが、ここ二十年程は中断していましたので、没後八十年のこの機会に再開し先輩方の思いに応えなければと強く思いました。告白しますと私は一度も参加した事のない不肖の後輩だったので尚更です。「筆山会だより」は一号で廃刊になり昭和六十年に現在のように組織化された関東支部の会報「筆山」に変身し、その後優秀な編集者がバトンを繋ぎ現在に至っています。

墓参会再開の為に、七月に嘗て世話役を務めた岩村さん（四一回）に道案内を頼み前田事務局長（三七回）と一緒に多磨霊園へ下見に行きました。想像以上に広大な霊園で、辿り着くのに時間がかかりましたが、無事墓参を済ませ、近所の深大寺境内のそば屋で墓参プランを練りました。

筆山会は昼食会、春と秋のゴルフ会、新年会（昔は忘年会）、三根校長墓参会を恒例行事として四十年余り続いてきましたが、最近は世話役のみなさまの尽力で別表の通り趣味の会が増え、女性や若い方の参加も多くなり賑やかになりました。そのうち〇〇球団応援会や競馬愛好会が出来るかも知れません。

昼食会では、母校やふるさと高知に関する話題や旅行の話、スポーツ、国際問題、宇宙の話等なんでもありで話し合っています。会則も会費もない自由な親睦の会ですので、気軽にご参加下さい。

（右）墓参者

十月の昼食会で、私の同期の中城さんから三根校長の略伝、教育方針、エピソード等のレクチャーを受け、十一月五日に広大な多磨霊園を有志十一人で訪れ三根校長の墓参をしました。史上初の女性参加者が五人も居たので、日頃磨いた「掃除力」が発揮され、瞬く間にお墓が綺麗になりました。

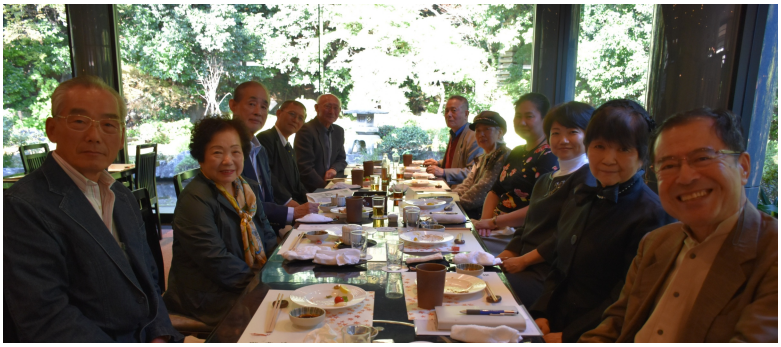
隣にあった長男で歌手のディック・ミネさんの墓碑には代表曲「人生の並木道」の歌詞が刻まれていました。ミネさんは関東支部が組織化された昭和六十年の第一回の総会に来られ、父上の思い出を熱く語られました。この時の写真は「筆山」創刊号に、又寄稿下さった「思い出の先生方」は「筆山」九号に載っております。編集関係者の尽力でデータベース化されましたので、関東支部のHPにアクセスしてご覧下さい。

三根校長、ディック・ミネさんの墓参の後、徒歩で十分位の所にある、筆山会初代会長の岡村先輩（三回）の墓に参り、その後迎えのバスで近くの深大寺に移動し、昔先輩方が飲んで語り合った、そば割烹「水神苑」で庭園を眺めながら歓談しました。紅葉は未だでしたが好天に恵まれ、快い一日でした。

歴代の校長は今も就任に当って三根校長の墓参をされているそうです。

母校は五年後に創立百周年を迎えます。百年前とは社会情勢や学校の規模、教育内容が大きく変っていますが、三根校長を仰いだ創立時の高邁な精神を忘れずに、少子化、グローバル化した新しい時代にもなお有為な人材を輩出するよう、母校の更なる発展を願っています。

（左）ディック・ミネさんの墓碑



（右）水神苑にて

# 海外からの報告

**長谷　至誠（ながたに　しせい）**
７６回生。森ビル㈱より森大厦（上海）有限公司に出向中。２０１３年より上海在住。

## 一．上海で超高層ビルを運営

七六回生の長谷至誠です。二〇一三年四月に上海に赴任して以来もう三年近くになりますが、上海は世界の都市でＬＡに次いで二番目に日本人が多いこともあり、日本での暮らしと大差なく、家族共々快適に楽しく過ごしています。海外で働いていると日本と比べ時間が経つのが本当に早いと感じるのですが、それは仕事をはじめ日々新たな経験をしているからかもしれません。

私は、上海の浦東新区陸家嘴金融貿易区という一九九〇年代後半から開発が始まったエリアにある、上海環球金融中心（ＳＷＦＣ）と恒生銀行大厦（ＨＳＢＴ）という二棟のビル運営・管理をする現地法人に出向しています。現地ではオフィスの賃貸営業を担当しており、二棟のオフィス床が生む賃貸収益は、為替の好影響もあり本社の連結営業収益の約６％を占めるに至ります。テナントとして、世界有数の外資金融や日本のメガバンク、著名なＩＴ企業等に多数ご入居いただいており、私は日々テナントの誘致や契約改定交渉、トラブル対応に奔走し、グローバル水準のオフィスサービスを提供することで収益の最大化を目指しています。

**外灘（バンド）エリアから陸家嘴地区の夜景を臨む。オレンジにライトアップされた栓抜き型のビルがＳＷＦＣ（１０１階建　４９２㍍）。その右隣は来年竣工予定の上海中心（１２４階建　６３２㍍）。**

## 二．上海マーケットをリードする

中国のＧＤＰ成長率が減速化しバブル崩壊間近か、という情報が溢れ返っていますが、データの信憑性が低いこと、また報道が過熱している部分もあるでしょうから、その実態は正直よく分からないというのが本音です。そんな中、世界有数の経済都市である上海は、いかなる状況でも最後まで生き残るだろう、という確信だけは持っています。

上海での賃貸オフィス市場は好調に推移しており、ＳＷＦＣの賃料水準は、東京の丸の内エリアのハイスペック物件と肩を並べるほどです。定期的な賃料水準の見直しのため、今後の周辺開発情報やトレンド、国の政治経済や規制緩和など、あらゆる方向にアンテナを張って情報収集に努め、中長期の戦略を立てて取り組んでいます。ＳＷＦＣの賃料水準はマーケットをリードしており、他社物件もそのトレンドに追随することが多いため、市場から注目されていることを肌で感じます。

東京と比べると上海のオフィス床面積はまだまだ少なく、今後も大量の新規供給が予定されており、競争は激化する一方です。これま

では日本式を導入することが是とされることが多かったのですが、今後は競合する香港やシンガポールのデベロッパーの良い部分も見習いながら、多国籍企業に受け入れられるためのグローバライズと中国特有のニーズに応えるローカライズを同時に進めていくことが目標です。

## 三、高知へのインバウンドの可能性

昨今、日本における中国人観光客の爆買いがニュースになっており、日本の各都市がインバウンド政策に熱心に取組んでいるのをよく耳にします。ここ上海でも、日本の地方自治体による観光プロモーションイベントが活発で、先日はＳＷＦＣにくまモンが来て熊本のアピールをしていました。

高知へのインバウンドを考えたときに、ネックになるのはアクセスの悪さですが、それを逆手にとることもできるのではないでしょうか。買い物目的なら東京や大阪・京都などの大都市へ行き、リゾート目的なら沖縄や北海道に行くことが多いですが、何度か訪日を経験した中国人は、団体ツアーでは行けないニッチな場所を個人旅行で訪れ、買物でもリゾートでもない新たな経験をすることにステータスを感じるようです。国内旅行者からの評価が高いことに表わされるように、食べ物・温泉・ヒトなど、高知には経験して初めてその良さが分かるものがたくさんあります。そこで、一般の中国人ではなく感度の高い中国人にターゲットを定め、彼らがアクセスの悪さを乗り越えて高知に辿り着けば、そこでの経験から得られる満足度はさらに高まると思うのです。また、中国人は自分の特別な体験をＳＮＳで発信することが大好きで、口コミの影響力は日本以上です。インフルエンサーとなるような人々の心を捉えることができれば、高知へのインバウンドには可能性があると思います。

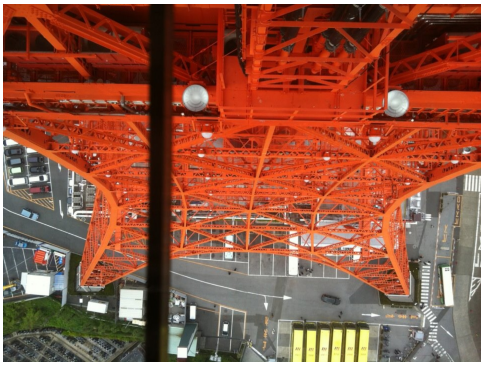
先日、インターネットで、中国人訪日客が高知を訪れた際にヤマモモとツガニが大好評だった、という記事を読みました。高知では、中国国内生産が減ったヤマモモがたくさん食べられること、また天然のツガニは養殖の上海蟹に勝るとも劣らないとのことで、意外なものにチャンスが眠っているようです。

微力ながら、私も上海で高知のアピールを続けていきたいと思います。（完）

# ふるさとへの手紙（二十）

長野太洋（87回）

今回、筆山「ふるさとへの手紙」の寄稿のお話を頂き、執筆することになりました八七回生の長野と申します。現在は日本大学理工学部の四年生で来年度から東京（全国、海外勤務有り）の会社に就職が決まりました。就職先は高校の修学旅行で見学したことがあり、土佐高校の新校舎の建設にも携わった会社です。大学一年生の頃はキャンパスが千葉にあり、二年生から現在まで東京のキャンパスに通っています。やはり、東京は高知とは大きく違います。人の数、店の数、建物の数、全てが高知とは大きく違い、選択の幅も広がります。日本人だけでなく海外の人も多く、話すことで文化や考え方の違いを学ぶことが出来ます。店が多い分、インターネット通販なんか使わなくても何でも実際に見て買うことが出来ます。大学で建築を学ぶ私にとって東京には高知にはない大きなドームなど他にも様々な建物があるので実際に見て学ぶことが出来ますし、ライブハウスやコンサートホールも多いので好きなアーティストやバンドのライブも高知より高頻度で観に行けます。遊びの選択肢も多く、勉強になることも多いので東京に出てきて良かったと心から思います。そして進路に悩む在校生には東京じゃなくても県外に出ることを推奨します。では、何故私が東京の大学に進学することになったかをお話し致しましょう。一つはセンター試験をもう一度受けることが考えられなかったこと、もう一つは東京の大学にしか受からなかったことです。受験勉強を怠っていた為に東京に飛ばされたと言っても過言ではないでしょう。ただ建築を学びたいということに関しては妥協することなく、建築学科は受験の譲れない条件でした。それでもイージーモードで大学入学を果たした私の人生のイージーモードは入学後も続きます。仮にも「高知県一の進学校・私立土佐高等学校」に通っていただけあり、イージーモードで入学した大学での勉強に困ることはなく、就職ですらＯＢの多い日本大学、母校の建設という大きな二つの武器を手に臨み、勝ち得ました。とにかく早くイージーモードを抜けることが今の目標です。そして、全国転勤のある会社なので高知に土佐高校新校舎のように（ここでは免震ゴムの話は抜きにして）立派な建物を多く建てることが私の将来の目標です。高知県を建設面から支えることが出来るように努めます。最後になりましたが、今回の貴重な機会を与えて下さった「筆山」編集部の方々、そして私のこれまでの成長に関わって下さった全ての方々に、改めて御礼申し上げます。



# 第18回はちきん会

## ２３～８８回生まで、つまり８６～２１歳まで大集合！！！

**２０１５年１０月３日（土）**
**「Ｂｅａｕ　Ｄｅｐａｒｔ（ボウ・デパール）青山倶楽部」にて**
**参加人数７７名（内いごっそう２１名・学生７名）**

ナイトは、イギリス紳士のようにダンディーな三八回生の羽方将之さん（株式会社オプトエレクトロニクス専務執行役員・関東高知県人会会長）がお引き受け下さり、女性の会費が少しでも安くなるようにご援助下さいました。

講演をお引き受け下さったのは、四九回生の小串記代さん（株式会社富士ゼロックス総合教育研究所執行役員）。「ＶＵＣＡ時代に求められるはちきん的要素」という題で、「働く女性はオッサン化しやすいので、はちきんの活力溢れる行動力に、さらに柳のようなしなやかな柔軟性を身につけて未来を切り拓いていきましょう！」と、自分のオッサン化を反省したり、はちきんの本質をも考えさせられたお話でした。

そして、今回嬉しかったのは、女生徒が初めて入学した二八回生の青嶋武子さんのご参加。東京女子医大を卒業され、なんと今年の三月まで現役の産婦人科医として活躍されていました。途中で、「お悩み相談＆解決コーナー」も開催され、はちきん達の職場や家庭でのお悩みを、先輩はちきん＆いごっそうの皆様が、スパッとスッキリ解決！？我も我もと相談者が手を上げ時間が足りなくなる程でした。かつては財界人や文豪が集まる会員制のサロンだった重厚感溢れる内装のレストランで、フランス料理に和のエッセンスを融合した「フランコ・ジャポネ」のお料理も絶品！秋晴れのもと、皆様のおかげで、「はちきん」らしく、明るく楽しく美味しい会になりました。来年も、たくさんのはちきん＆いごっそうの皆様の御参加をお待ちしております！

**五六回　濱田知佐**

（右）ナイトの羽方将之さん（三八回）

（左）小串記代さん（四九回）

# 講演　小串記代

はちきん会でお話をする機会をいただいた時、最初に頭をよぎったのは、「まっこと、はちきんやねえ」と言われたら、これはほめ言葉なのだろうか、という疑問でした。ウィキペディアによると、はちきんは、「話し方や行動などがはっきりしており快活、気のいい性格で負けん気が強いが、一本調子でおだてに弱い。後ろを振り返ることなく前進し続けるといった頑固さや行動力あふれる点で土佐の男性と共通する」とあります。

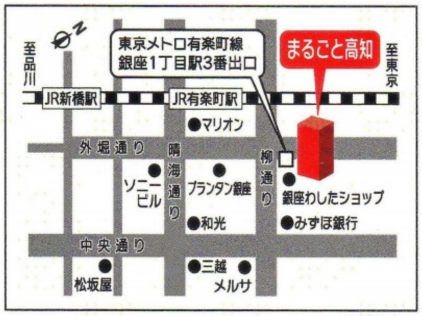
今は、Volatility（変動性）・Uncertainty（不確実性）・Complexity（複雑性）・Ambiguity（曖昧さ）という言葉で表わされるＶＵＣＡの時代です。こういう時代は、自分がどう生きたいか、何を成し遂げたいかという本質的な問いを自らに投げかけ、道をつくることが求められます。同時に一人では答えが見いだせない複雑な時代です。異なる多様な意見に謙虚に耳を傾け、集合知から新しい価値を創り上げるということが求められます。先行き不透明な時代には、キャリアも予期せぬ偶然によることが多々あります。日頃から予期せぬ出来事をキャッチする準備をし、偶然をステップアップの機会にすることが大切になります。つまり「計画的な偶発性」（Planned Happenstance）です。この偶発性をとらえるためには、好奇心、持続性、楽観性、冒険心、柔軟性が求められます。はちきんの特性に目を向けると、ポジティブで前進し続ける行動力は、社会課題を解決する重要なパワーになるのではないかと思います。計画された偶発性についても、柔軟性を備えれば、まさにはちきんは時代の人です。一方、頑固さや白黒つける果断な強さ（短気？）は他者の意見を聴くことや、不透明な状況でしなやかな回復力を維持することにはリスクとなるかもしれません。困難にあっても短期的な視点に陥らず、柳のようなしなやかな、或る意味したたかな柔軟性を持つと怖いものなしです。

はちきん会の皆さんは、家庭においても仕事においても活力溢れる方々が多いように感じます。お酒も強いですし、オヤジ的要素があるかもしれません。最近の女性には、「チャック女子」が増えたと言われています。「チャック女子」とは、外見は女性の着ぐるみを着ていますが、背中にチャックがあり、それを下すと中から「オッサン」が出てくる、つまり思考も行動もオス化しているというものです。会場の中からは、「チャックが半分開いて、オッサンがはみでてきちゅう」という声が聞こえてきました。私自身も話しながら、思わず背中のチャックがしまっているかどうか確かめてしまいました。

今回あらためて「はちきん」の本質？を考え、自分自身を内省する機会をいただいたように思います。年を重ねると本来持っているものが表出しやすくなります。いつまでも柔軟に自己変革できるよう他者に耳を傾け、謙虚さを大切にすることを心がけたいものです。

はちきん会での多くの方々との出会いに感謝するとともに、ナイトをしてくださった羽方先輩、はちきん会世話役の皆様に心より感謝申し上げます。


おきゃく
TOSA DINING
一般財団法人
高知県地産外商公社
プロデューサー
濱田知佐（56 回）
アルバイト
西村希生（83 回）
山﨑沙央里（83 回）
和泉侑吾（87 回）
委原　健（87 回）
下田　優（87 回）
高木菜水（88 回）
清岡玲布（88 回）
渡邊真子（88 回）
高田裕斗（89 回）
竹内　駿（90 回）




www.marugotokochi.com/
Tel 03-3538-4351（サンゴ・皿鉢・ヨサコイ）
〒104-0061 東京都中央区銀座1－3－13

# ハンドボール部ＯＢ･ＯＧ会

## 私たちは、土佐高ハンドボール部 OB･OG会関東支部会員です。

かねてより、高知にあるOBOG会本部より卒業生も増えたので関東支部を作って欲しいという要請を受け、2014年に発足しましたが、今回2回目の懇親会が、去る9月5日に高知の方が経営する新橋の浪漫亭で行われました。 高知からはるばる参加の本部副会長の平野太平（38回）、支部会長の黒川雄爾（37回）、副会長石原哲（40回）、幹事長堀見淳二（42回）、事務局長池添大志（75回） 以下11名の有志が、鰹のたたき、虎杖の煮物等々に舌つづみを打ちながら献杯を重ね、あっという間に3時間を過ごしました。

その席で事務局補佐として北岡明（85回）が選出されました。池添君の前任で今年ドイツに転勤した由藤俊介君（75回）に感謝します。 まだ活動実体に乏しい私たちですが今後も盛り上げて行きたいと思っていますので、ハンドボール部OBOG関東近辺に在住の方、事務局までご連絡をお願いします。

事務局連絡先　池添大志　75回　（hikezoe@its.jnj.com 090-5438-3137）

**-閑話休題-**

ハンドボール部は毎年１月２日に新年会と称し、ＯＢが集い土佐高グランドで現役チームと試合を楽しませて貰う行事があります。最近参加させてもらったのは２０１０年で、還暦を過ぎた私は中学１年生のチームと試合をし、試合終盤に速攻を主に５分間で１０点を取られ大逆転されました。その１年生たちが昨年、高校３年生になりインターハイに出場し、川崎市のとどろきアリーナで試合をしたので関東支部会としても三役を中心に応援に行きました。１回戦で京都代表に敗れましたが、非常に感慨深いものがありました。我々の時代にはなかった女子ハンドボール部もインターハイに出場するなど活躍しています。関東に出てきているＯＧも今後是非会合にも参加していただければと思います。石原哲（４０回）

# 森本堯士先生をお招きして 硬式庭球部

## 秋のＯＢ・ＯＧ会に参加して

秋も深まる１０月３１日（土）に森本堯士先生を高知からお招きして、土佐校関東在住テニス部恒例のＯＢ・ＯＧ会が開かれました。場所は、銀座一丁目にあるベトナム料理のお店「モンスーンカフェ」です。スマホの地図アプリを駆使しながら地下のわかりにくいお店にも参加者が集まってくる様子をみて森本先生が「みんなあこんなお店に迷わんとようくるなあ」という言葉を聴いて、場の空気は一気に和み…そしてその森本先生のご挨拶から会はスタートしました。

森本先生のお話は、土佐校テニス部の近況報告から過去の思い出話、そして関東にお住まいのお姉さまをお見舞いに行く機会が出来たことへの感謝の言葉と続きます。お話の締めくくりにそのお姉さまを想って詠まれた仁淀川の風景を思い出す一句は胸に迫るものがありました。私事ではありますが、仁淀川沿いにある家に嫁に来て、家族の理解もあってその家を出て東京で訪問看護事業を立ち上げた自分の姿と森本先生のお姉さまのお姿を重ね合わせると同時に今まさにケアさせて頂いているご利用者やご家族の皆様の姿もぼんやりと思い浮かべて聴き入っておりました。

続いて、最年長の小川先輩の乾杯の音頭から、総勢２１名参加者全員の近況報告が行われました。全員が近況報告していくには、途中２回の休憩を挟まないといけないほど、熱く、心を込めて語られました。そうした一人ひとりの近況報告を聴いた森本先生は「万感迫るものもあって何度も目頭も胸も熱くなりました。あれはいいですねえ。それぞれの立ち位置でなんと頑張ってまじめに人生していることか！感動でした」と（後日参加者の一人にメールで語った内容より）。この先生の感想が会の素晴らしさを何よりも物語っていることと思います。そして、この素敵な会の実現は５３回 澤田先輩のご尽力の賜物です。先輩の日頃の仕事・プライベートを超えた人脈を活かすと同時にＳＮＳを駆使した幹事ぶりは流石の一言です。また、参加したいと全員が思ったことでしょう。次の機会には、関東在住の土佐校テニス部のＯＢ・ＯＧの皆様ふるってご参加くださいませ。**久保田聰美（旧姓：宮本）（５６回）**

【参加者】森本堯士先生、小川洋（４９回）、野中尚人（５2回）、中屋亮・山本博徳・山口祥弘・澤田和英（５３回）、長山晃・大楫保利（５４回）、土居大祐・安岡英亮（５５回）、久保田聰美・濱田知佐（５６回）、谷嘉明・河野和寿（５７回）、森木隆裕・中平公美子（５９回）、宮岸和明（６４回）、深田晋平（73回）、西クルミ（８１回）、中山雄二（８６回）（敬称略）

# 江戸百景（八）山谷　八百善

江戸の会席料理というものは、（江戸っ子でなくもっと上流の）江戸人の気質を反映した華やかな料理で、江戸時代後半に江戸の料理茶屋で発達した。

江戸文化のもっとも爛熟した文化文政期（１８０４～３０）に、料亭（料理茶屋）として最盛期にあった山谷の「八百善（やおぜん）」は、江戸時代に発行された様々な料亭番付でも常に勧進元として君臨していた江戸を代表する料亭であった。それも超がつく高級料亭であった。守貞漫稿（嘉永頃＝１８５３年頃）に「江戸ニテ名アルハ、三谷（山谷）ノ八百善＝中略＝当戸ヲ江戸第一トス。」とある。

八百善は、享保年間（１７１７年頃）に浅草山谷で創業して、初めは仕出し料理屋を始め、のちに座敷で客を取る料亭に発展した。八百善の四代目亭主栗山善四郎は趣味が広く、当時一流の文人墨客と交流があり、その善四郎が文政五年（１８２２年）に刊行した「江戸流行料理通」は当時の料理テキストとも言うべきものだが、太田蜀山人・亀田鵬斎が序文を寄せ、谷文晁、葛飾北斎、酒井抱一、鍬形蕙斎らが挿画を描いて評判になり、江戸土産としても人気を博した。

蜀山人作の狂歌に詩は五山役者は杜若　傾はかの芸者はおかつ　料理八百善

というのがある。無論、当代で一番のものを並べたものだ。

〈一両二分の茶漬け〉

八百善の逸話の中でもっとも有名なのが、この話である。寛天見聞録という嘉永頃（１８５０年頃）の随筆に載っている。

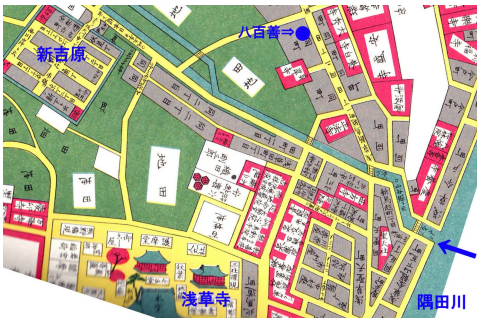
あるとき美食に倦きた客が数人、さっぱりと茶漬けでも喰おうと八百善の座敷に上がって「極上の茶漬け」を注文した。しかし、なかなか注文の品が出てこない。なんと半日以上も待たされて、やっと出てきたのは、なるほど極上の茶漬けと香の物であった。さて帰る段になって勘定を聞くと一両二分（現代の貨幣価値にして約十五万円）だという。驚いた客が問いただすと、主人が出てきて説明した。

「香のものは春には珍しい瓜と茄子を切り交ぜにしたもの、茶は宇治の玉露、米は越後の一粒選り、中でも最も金のかかったのはお茶に使った水で、宇治の上茶に合わせるにはこの辺の水はよくないので、早飛脚を仕立てて玉川上水の取水口（羽村）まで水を汲みに行を払って帰ったという。

〈八百善のはりはり漬け〉

五月雨草紙という嘉永頃（１８５０年頃）の随筆にある話。

ある人が知人を訪ねて饗応されたが、出された香物のはりはり漬けを食べたら餘りに美味だったので、どこで作られたものかと尋ねたら、八百善の調理なる由。よって使いの者に陶器の入れ物を持たせて（八百善に）買いにかせた」と言うのである。それを聞いた客は「さすが八百善」と納得して金

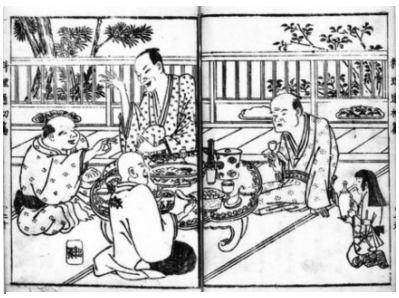



（上）江戸切絵図＜尾張屋清七版（嘉永頃-1850頃）＞矢印が山谷堀出口で、山谷堀沿いに続く道が新吉原へ行く日本堤。八百善は日光街道沿いの丸印の場所にあった。周りは寺町で寺が多く、法事の仕出しから発展したという。

（上）歌川広重「東都名所」より「真土山之図」（天保二年-1831）。上図の矢印方向から見た図（隅田川の対岸向島から描いている）。右に山谷堀出口と今戸橋が描かれ、左の岡は待乳山聖天社。遊客は今戸橋で猪牙舟を降り、山谷堀沿いの日本堤を歩いて新吉原へ向かった。

（上）上図と同じ方向から隅田川を背にして筆者が撮影。右の樹木のところが山谷堀で今は暗渠となり、その上が細長い山谷堀公園になっている。今戸橋は今はない。左の樹木の高台に待乳山聖天社が今もある。

（上）八百善亭。この絵は建物の左半分で、描かれてない右半分に調理場や住居等があったと思われる。八百善は調理人だけで常時三十人を擁していたという。



（上）八百善の二階座敷にて文人会食図。『江戸流行料理通』の挿絵。左より時計回りに、大久保詩仏（漢詩人）、亀田鵬斎（儒者・書家）、太田蜀山人（儒者・狂歌師）、鍬形蕙斎（絵師）。

〈勝海舟と八百善〉

勝海舟は若いころから八百善に水で洗わず、最初より味醂酒で洗うので高価になります、ということだった。

川宗家の後見人みたいなもよく行ったようだ。維新後は徳川十三代将軍定家亡人の天璋院（篤姫）のお伴をして、何度か彼女を八百善に連れて行ったことがあると言っている。（海舟座談）

〈四一回　西岡恒憲〉

やったら、ほんの少しで代金三百匹（＝金三分＝約七万円）であった。

（泥を落とすのに）手前どものはりは、尾張の細根を採り、辛みを生ぜしめざるため、大根より二、三一捨本（残りは捨て）のなかと問わせたら、こんなに高いものだ。

選いる。ぬきの珍らしい目下のも肉なた。鯛の新料理は皆なまた八百善のことをこう語って座談）

炭物ばかり仕出し始めの頃は、落しの取り肴は、尾張の細根を選び、大根より二、三一捨本（残りは捨て）のなかと問わせたら、こんなに高いものだ。

（出火の室）すると、人工温室のひとり捨て）、そのハシも、吸物の肉の切り少丈角の料理は、江戸一、日本一、そのうまさ、講釈師、聞かれ、一分一厘のケチ、皆同じで、違わぬ程、シャンとたっていた。

（おかしなもの）、（お）、（お）、（お

# 母　校　便　り

学校長 山本　芳夫　（４０回生）

関東支部同窓生の皆様におかれては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。また、平素は母校に対し格別のご厚情とご支援を賜り心から感謝申し上げます。

**○学校行事について**

（一）九月二二日（国民の休日）に開催された今年の第六八回運動会は、雨に祟られ予行が出来ないままぶっつけ本番の運営進行となりましたが、当日は澄み渡った秋空となり高三生が創意を凝らし造り上げた櫓の下に大勢の来場者を迎え盛大に行われました。長い歴史の中で練り上げられたスピーディーに展開される各種競技・演目の数々とそれに直向きに取り組む生徒達の姿は見る人の感動を呼びました。そして何よりも、協力一致でやり遂げた全土佐中高生の心に忘れがたい思い出として刻み込まれたものと思います。

（二）十月は来年度の中高入試に向けた学校説明会のシーズンとなりますが、例年、中学と高校の学校説明会を本校で、中学高校合同の学校説明会を土佐・須崎地区と幡多地区で開催しております。中でも、中学学校説明会には多く（今年の参加者数は約一四五〇名）の小学生と保護者が参加されます。また、これ以外にも学校や塾などにも個別に訪問活動も行っておりますが、少子化が進行する中、向上心のある優秀な生徒の確保を目指して多面的な活動を継続してまいります。

（三）その他の学校行事としては、十一月は高一生の修学旅行、三学期に入り一月は高校卒業式（九一回）、二月は中学の合唱コンクールと中二生のスキー研修（新潟越後湯沢）などが予定されております。尚、年明け早々の一月十六・十七日にはセンター試験が行われ、いよいよ大学受験が最終段階に入ります。新卒生、捲土重来を期す過卒生ともども志望が叶うことを心から念ずるところであります。

→ 第六八回大運動会　やぐら

**○高一生の修学旅行について**

高一生の修学旅行（東京・京都）は十一月十六日から二十日の予定（東京の日程は前半三泊）で行われますが、特に、東京二日目に行われるコース別研修に期待を膨らませております。今年は次の十コースです。①最高裁判所・国会議事堂・弁護士会館②三省堂・ＴＢＳ③東京証券取引所・日本ＩＢＭ④東京大学・外務省・ユニセフ東京事務所⑤中外製薬浮間研究所・早稲田大学⑥高エネルギー加速器研究所・筑波宇宙センター⑦千葉工業大学未来ロボット研究センター・東京国立科学博物館⑧清水建設・ＪＡＬパイロット養成施設⑨北里大学付属病院・ＮＴＴ先端技術研究所⑩理化学研究所・東京警察病院（順不同）。訪問先の同窓生の皆様には何かとお世話になりますがどうか宜しくお願いします。（この「筆山」をご覧になる時点では既に訪問が終わっていると思いますが、色々お世話いただき有難うございました。）

**○新たな寄付制度について**

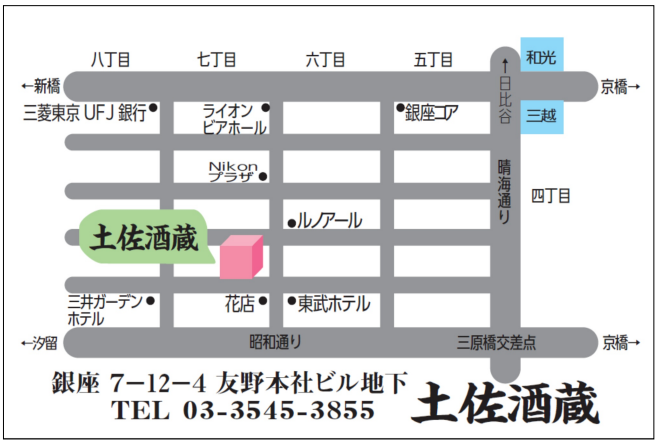
第二次百年委員会の答申を受けて検討を進めてきた新たな寄付金制度「土佐中・高新世紀募金会」の概要が先日開催の理事会にて決議されましたが、同窓生はじめ多くの方々にご参加戴ける制度設計となっております。細目が決まった段階で改めてお知らせすることとなりますので、その節はご協力の程よろしくお願い申し上げます。

向寒のみぎり、関東支部の皆様の益々のご健勝とご多幸を心からお祈り申し上げ母校だよりとさせていただきます。良いお年をお迎え下さい。

（平成二七年十月末　記）

## お　悔　や　み　申　し　上　げ　ま　す

| | | | |
|---|---|---|---|
| ３１Ｈ | 吉村 | 俊秀 | 2014.11.7 |
| ５２Ｈ | 伊藤 | 精彦 | 2014.11.23 |
| ３８Ｏ | 三宅 | ヨシロウ | 2014.12.17 |
| ３４Ｓ | 國見 | 昭郎 | 2015.2.11 |
| ２８Ｍ | 中野 | 優 | 2015.3.17 |
| ２８Ｍ | 西山 | 全子 | 2015.4.18 |
| ４６Ｈ | 横畠 | 邦彦 | 2015.5.26 |
| ４１Ｎ | 須藤 | 博志 | 2015.7.28 |
| ４７Ｏ | 森川 | 喬 | 2015.9.19 |
| ５２Ｈ | 渡辺 | 都子 | 2015.10.2 |
| １４ | 谷川 | 寛三 | 2015.11.30 |

# ハイクの会

平成２７年９月５日～６日

一日目　登山組は扉峠から茶臼山を経て美ヶ原の王ガ頭へ
　　散策組は美ヶ原高原美術館から王ガ頭へ　諏訪湖畔のホテル泊
二日目　戸隠神社奥社と鏡池　中社近くの温泉と昼食　帰路にて俳句と川柳

雨の中を黙々と歩いた鏡池までの道　皆が集合する頃には雨も止んで湖面も鏡となった

## 百名山を追いかけて

信濃の国の大きな町、長野と松本を隔てている山群で頂上の広大で平坦な草原を持つ山が、なんとか山という呼称ではなく、美ヶ原と呼ばれている。一九六八年のビーナスラインの開通以降、観光バスで行ける二千メートル峰ということで、誰もが知ってる観光地になっている。しかし、この山は、深田久弥が選んだ百名山の一つで、深田は松本側の三城牧場から、この山に登り、その印象を、「全く桁が外れて広い、広闊な山上の草原が果てしもないように続いている」と書いている。

土佐ハイクの会も百名山を追いかけているので、これを外すわけにはゆかない。いや、正直に言うと山行十九回を重ね、参加者の主体となっている三七、三十八組は、齢七十を超し、弱音を吐き出している。だから「シイヨイ」と言っていた山を敢えて選んだというのが実態である。

一日目は晴れ渡る天気で、予定を入れ変えて一気に山に行くこととなった。登山組は、扉峠から南峰の茶臼山を経て、美ヶ原頂上の王ガ頭に達する道を、散策組は高原美術館から同じく王ガ頭に至る道をあるく。

### ◆登山組十七名　景色も良好

岡野さんのヒデ君（五年生）とアキくん（二年生）が今年は一段と成長し、大きな声で大人を叱咤激励しながら茶臼山までの登りをリードした。膝が痛いが登る、と言って登山組に参加したカメちゃんこと西内さんは、登り始めてすぐ、オレは帰る、と弱音が出たが、池田さんに励まされ、なんとか頑張って高原の南峰に到着、草原に出てからは、一段と口数が多かった。

蓼科や霧ヶ峰を見ながらの快適な道を四百メートルほど上がると深田の言う大草原が広がっていた。牛が草を食み、遠くにはＴＶなどの鉄塔が林立するのが見える。山上のホテルにマイクロバスが客を運ぶ傍に、高山植物が咲き、雉の姿が見えたりした。高原からは中央アルプス、御嶽、乗鞍、八ヶ岳連峰が見え、景色は申し分なかった。

■**散策組十三名　二才も頑張る**

午を告げる鐘の響く中、美ヶ原高原美術館に到着。ここから散策組の美ヶ原高原の縦走が始まる。高山の花々が咲き誇る木道の階段を、牛伏山に向かって登って行く。パノラマコースの遊歩道は、牧場のフェンスに沿っていて、広大な牧場にはホルスタインや美味しそうな黒毛和牛がのんびりと草を食んでいる。ゆるやかな登りに、各人で気の向くままに歩くが、何処に居ても姿が目に入り安心出来る。美しの塔では、鐘を鳴らし目標の王の頭ホテルに登り、休憩を取る。四十三の名だたる山々が望められると言われたが、残念ながら雲の中。二才から七十八才までが二千メートルの天空の風を受けて、下界の喧噪を忘れて歩いた。心安らぐ午後であった。

帰りの俳句の会の部でも、この景色と、子供たちの活発な声を題材にした句が上位入選している。散策組もほぼ平らとはいえ、いつもより長い距離を踏破し、気分良く高層原野のハイキングを堪能出来た。

■**宿泊地の戸倉上山田に**

予定時間よりも遅れてホテルに着くと、今年から筆山会の会長となった三〇回の浅井先輩が出迎えてくれた。わざわざ予定を変えてご夫婦で夜の部に参加してくれたのである。新会長も非常に配慮の行き届いた大先輩で、土佐の伝統である先輩が後輩の面倒を見るというしきたりを体現してくれている。

**俳句は感性、川柳は知性　お題「花野・露」**

《俳句》

子の声の　すきとおりくる　花野かな　　中島宏

幼な子の　手を引き歩む　花野かな　　橋田恵美子

天高く　神より降りし　杉の露　　岡野啓

《川柳》

断捨離の　行き着く先は　我が身かな　　橋田恵美子

下仁田の　ネギ齧(かじ)りつつ　色話　　池田博臣

おおつらも　今日は子猫に　毒の横　　中島宏

■**樹齢約四百年を超える杉並木**
**萱葺きの随神門をぬけ奥社へ**

二日目は今にも降り出しそうな天気の中、バスで戸隠神社奥社へ。二キロはある山道には両脇を小川が流れ、オオシラヒゲソウが咲き、大木があちこちに林立している、随心門を過ぎると日光の杉並木と見紛うばかりの巨木が出迎えるので、見とれているうちにいつの間にか奥社につく。奥社にはほぼ全員が参拝、我々は山の会の将来と来年からも欠員が出ないことを祈願した。その後、本格的な雨となり、名所の鏡池へは雨の中を歩くことに、雲にかくれ山々を背に集合写真を撮る。中社付近の温泉で汗を流し、名物のそばとビールで昼食を済ませ帰途に着いた。

■**さあハイクの時間です**

帰途のバスの中は、恒例の俳句作成の時間、すでに中山宗匠より「花野」「露」を含め三句というお題が与えられていたので、登山、散策中から皆頭をひねり、傑作がぞくぞくと生まれた。年々レベルが上がってきている。そして、知性の勝負と言われる川柳にも挑み、各自二句を提出。いつものことながら、岐阜に住む陶芸家三八回の井上さんが値うん十万円の器をたくさん提供してくれた。入賞者の持っている写真で読者はその良さがわかるであろう。

今年は、幹事の中島さん、幹事元締めの橋田夫人の二人が俳句、川柳の双方で入賞した。「俳句は感性、川柳は知性」と言われるが、それらを二つながらに持っていることが証明されたことになり、知能、感受性そして顔（？）もすばらしいことが皆にしれ渡った。

カメちゃんは、例年「鈴の音涼し」を句に入れて賞を得てきた。今年はそれをアレンジし、「虫の音涼し」に変えて投句した。が、賞には至らなかった。

**濱田継夫・中村裕子（三七回）**
**写真協力・沢村武彰（三八回）**

一般社団法人
土佐婚倶楽部®
婚活のお悩みを心を込めてサポート致します
代表理事・東京相談室長　織田祐輔（45回生）
顧問弁護士　浦田理有（76回生）
顧問　岩松潤二（45回生）
URL http://tosakonclub.com/
東京相談室　042-521-2020
〒190-0012 東京都立川市曙町1-12-19 吉田ビル401

# 筆山　創刊より３０周年

１９８５年１１月。当時１８００余名となった関東支部会員のお互いの親睦を図り、母校の発展にも寄与できる会報誌になるようにと期待されて創刊号が発行されました。第５０号時にはバックナンバーが整理され、１号から閲覧できるようになりました。

創刊から３０年、今回はこれまでに編集に関わってきた方々にエピソードをお聞きしました。想い出の記事や出来事からは、楽しく編集されていた様子が窺えます。

登場は、小松勢津子（３５回）・岩村康生（４１回）・鶴和千秋（４１回）・西岡恒憲（４１回）・藤宗俊一（４２回）の５氏です。（編集部）

みなさんもバックナンバーから若い日の自分の姿を探してみませんか。
【土佐高　関東支部】で検索すると、左肩に校章のあるホームページへ。
校章の下６番目「支部報・筆山」をぜひのぞいてください。30年を振り返ることができます。

## ー創刊当時のエピソードを教えてください。

小松

**小松**　「編集会議はいつも、ＪＲ総武線の飯田橋駅東口の『喫茶白ゆり』で。岩村さんと私の会社に近かったからだ。１階がパチンコ屋さんの２階。いかにも昭和の昼下がりといった、レトロで居心地はいいけれど、派手派手の不思議な店だった。２００９年に閉店したとか。」

**岩村**　「創刊編集会の開かれた喫茶店は、ただっ広い古典的な店だった。ボックス席には、当時の言葉で言えばアベックもおらず、傍目を気にせず土佐弁がしゃべれたのが有り難かった。」

ー　岩村

**小松**　「関東支部の機関誌を発行することになり、最も困ったのはその誌名だった。土佐中・高の新聞部の紙名ですでに廃刊になっていた『向陽（新聞）』と、同じく文芸部の誌名でやはり廃刊されていた『筆山』以外思いつかなかった。結局『筆山』に決定！」

藤宗

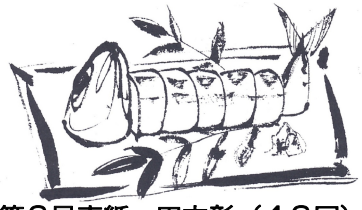
## ー思い出に残っている記事は？

**藤宗**　「『甚太先生歳時記』をきっかけに、最も嫌っ（われ）ていた最終学級主任と仲直りできたこと。」

**西岡**　「『猿も寝らあ（サルモネラ菌中毒事件）』や『籠尾監督最後の甲子園・特集記事』が思い浮かぶ。」

西岡

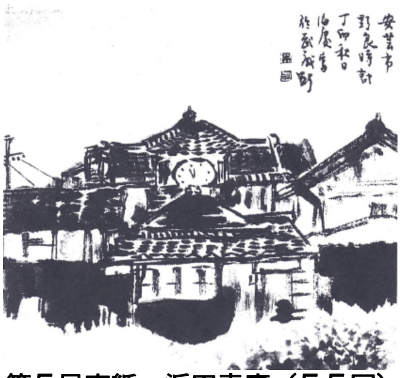
**岩村**　「勝手に『東映時代劇・姫拉致監禁事件』と呼んでいる鶴和君の１７号（１９９３年１２月）の記事が印象深い。突然事務局を言い渡された彼の驚きがユーモラスに綴られている。呼び出しの電話を受けた時、彼は事務所の引っ越しの真っ最中であった。駆け付けた赤坂の小料理「土佐」の奥座敷では同窓会関東支部の幹部たちが待ちかまえていた。いきなり事務局を引き継げとのお達しである。まさに晴天の霹靂。その場の雰囲気を３０年代の東映映画で悪代官や取り巻きたちに詰め寄られ、逃げも隠れも出来ないか弱き姫になぞらえている。悪役とは同窓会関東支部草創の頃からの古老たちで多くは既に鬼籍に入られた。記事の正式のタイトルは『事務局を拝命しました』とおとなしいが中身は実に柔軟で面白い。」



第３号表紙　田中彰（４３回）

**西岡**　「失敗談はいっぱいあるのだが忘れられないことが一つある。ある号の編集が終わり、印刷も終わり、発送直前に、物故者通知欄「お悔やみ申し上げます」にまだ存命中の大先輩の名前を間違って載せてしまったことが分かった。泡食って夜中に印刷担当の同期４１

回岩村編集委員に電話して、発送直前の印刷済み筆山を全部廃棄して、全て印刷しなおしてもらった。余計な経費がかかってしまった。その後岩村君は確認のためその大先輩本人に電話をしたという。「 やっ ぱり まだ 生きちょったぞ」とあとで報告を受けた。冷汗三斗の思い出。」



第５号表紙　浜田幸康（５５回）

**小松**　「第７号の、東大工学部教授で、東大野球部投手として１７勝し、当時土佐校の理事会の顧問でもいらっしゃった岡村　甫氏（３２回）の母校へのご注文に感銘を受けた。「私は教育というのはそれにかかわる人の資質や向上心ややる気がすべてだから、それをいかに高めていくかが一番大事だと思うんですね。（以下略）」私の今後の人生の目標は「機嫌よく一人で暮らす」なのだが、この「機嫌よく」がなかなか難しい。教師と生徒の一人二役を務めながら、楽しく「土佐校ごっこ」をして行きたい。」

**ー編集に関わるようになったきっかけを教えてください。**

**藤宗**　「事務所を開いて暇していた頃、それまで『土佐高には何の恩義もない』と嘯いて同 窓会活動に無関心だった人間に岩村さんから突然幹事会への招待状が届いた。『もしかすると仕事の話が…』と、助平心を抱いたのが悪の道に引き込まれた発端です。その席で『小松さんが仕事の都合で…』という悪意に満ちあふれた岩村さんの挨拶だけで、『 筆山』の編集委員に任命されてしまった。しかも、あのサルモネラ（猿も寝らあ）事件で奥様から『ウチのは殺しても死にません！』と言われた戸田さんが編集長。９号 から１４号まで、『後は頼んだぜよ』が口癖の名 編 集 長にこき使われ、『ちょっとブ ラジルに行ってくる きにヨロシク』と 編集長の座まで押し付けられてしまった。結局２４ 号ま で足かけ１０年間ご奉公させていただきましたが、その間、仕事の話 は一 度 も無し。只、他では 得 難い先輩 、後輩に恵ま れたことを感 謝しています。」

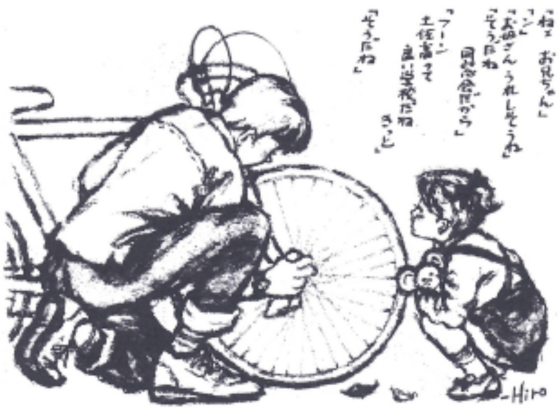
**第二代編集長・戸田博士（３８回）さんは、数々の逸話（筆山２８号）を残されて、平成１２年２月１２日、お若くしてご他界されました。**
**１５年経った今、改めて故人を偲び、ご冥福をお祈りします。**

**西岡**　「同期４１回の鶴和鬼事務局長の強請で無理やり始めさせられたが、編集 委員の人たち が 皆ユニークで良 く働 く人たち な ので一緒 にやるのが楽しかった。」

**鶴和**　「同期の岩村氏をはじめとするお歴々に手籠め同然に関東支部事務局を引き受けさせられ、『筆山１７号』でか弱き姫になぞらえられた吾輩であったが、僅か５年後に鬼の形相に変貌、同期の西岡氏に２５号からの編集長を押 し付けた 。そ の西 岡 氏も５２号 で は 往 年の 美少女、現在も“童女”と尊 称される永森 嬢（４４回）に向後を命 ず る 。げに怪し恐ろし同窓会の世界ではある。」

鶴和

**鶴和**　「永森嬢 は 約束 の２年の年 季明けを待たず５５号で一時休養の止むなきに至った。東京オリンピックで復活が期待されるソフトボールに“リエントリー”というルールがある。チャンスで投手に打順が回ると強打の代打を送り、或いは投手が出塁すると俊足の代走を送る。その投手は次の回の守備から再びマウンドに上ることが出来る<再出場>のルールである。曰く「童女様、早ようもんて来いや」、曰く「おまんが居らんと宴会が盛り上がらんき、しょうイカン」。古里で英気を養いつつある　永森嬢に聞えよとばかり、リエントリーを待ち望む声、巷より沸々と湧き上がる。編集部一同も一日千秋の思いで復帰を待ち侘びている。」



第１３号表紙　佐々木泰子（３３回）

**中平**（５９回）　現在、永森さんから、怪し恐ろし同窓会の世界？に引きずり込まれた私は、あこがれる先輩や応援したくなる後輩に「『筆山』　書いてくれませんか？」とささやく日々。「若いうちの苦労は買ってでもしろ！」というがもう５０歳と若くはない。「経験は財産だ」というが飲み会代は嵩む。でも、どっぷり浸かって心地いい湯加減なのがなんとも不思議です。編集員募集中。皆で混浴しませんか。

**田島征三（34回生）**
「かとりせんこう」
<2015.6 ¥864 福音館書店>

「学校はからっぽにならない」
<2015.11 ¥720 現代企画室>

「オオカミのはつこい」
<2015.11 ￥1,512 偕成社>

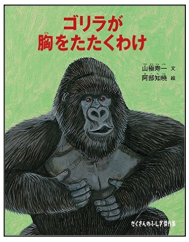
「(空間絵本) 学校はカラッポにならない 鉢&田島征三絵本と木の実の美術館 2009-2015」
<2015.11 ￥4,320 現代画室>

**西村繁男（40回生）**
「おばけもこわがるおばけ」
<2015.7 ￥1,404 童心社>

**高山宏（42回生）**
「さかさまさかさ（ピーター・ニューエル作）」
<2015/9 ¥1,728 亜紀書房>

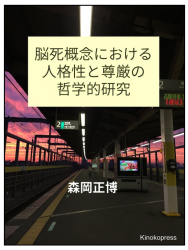
**加賀野井秀一（44回生）**
「知覚の本性[新装版] モーリス・メルロ=ポンティ著」
<2015.6 ¥2,160 法政大学出版局>

**阿部知暁（51回生）**
「ゴリラが胸をたたくわけ」
<2015.9 ¥1,404 福音館書店>



**坂東眞砂子（51回生）**
「真昼の心中」
<2015.7 ¥1,620 集英社>

**森岡正博（52回生）**
「草食系男子の恋愛学 ： 草食系男子の恋愛学 [Kindle版]」
<2015.11 ￥566 KADOKAWA /メディアファクトリー>




「脳死概念における人格性と尊厳の哲学的研究[Kindle版]」
<2015.6 ￥1,851 Kinokopress >

「書評という快楽 ： 臨死体験からＡＶ女優まで[Kindle版]」
<2015.7 ￥250 Kinokopress>

**門脇護（53回生）**
**（ペンネーム　門田隆将）**
「神宮の奇跡」
<2015.9 ¥821 講談社>

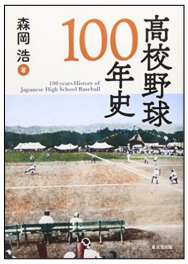
「日本、遥かなり：エルトゥールルの「奇跡」と邦人救出の「迷走」」
<2015.11 ￥1,728 PHP研究所>

**英保未来（54回生）**
（ペンネーム　大森望 ）
「ブラックアウト 上＆下（コニー・ウィリス著）」
<2015.7 各¥1,037 早川書房>

「NOVA＋　屍者たちの帝国」
<2015.10 ¥821 河出書房新社>

**森岡浩（55回生）**
「高校野球100年史」
<2015.6 ¥3,240 東京堂出版>

「高校野球　熱闘の100年：甲子園の怪物たち」
<2015.6 ¥864 KADOKAWA>



「少しかしこくなれる名字の話 ： イラストですっきりナットク!!」
<2015.8 ￥637 笠倉出版社>